

奥村高明氏

(芸術学博士、日本体育大学児童スポーツ教育学部教授、専門は美術鑑賞教育等)

海外には、認知症と家族のための美術鑑賞プログラムがありますが、最近では国内の美術館や介護施設等でも提供されるようになりました(※)。実施方法は、対話による美術鑑賞をベースにしたもので、作品を前に参加者が思いついたことを話したり、話し合ったりするものです。

国内外では、対話以外の美術鑑賞の方法として様々なアクティビティが行われています。日本ではアートカードを用いたアートゲームが手軽な方法として広く普及しています。ゲームという形を採り、一人で考えたり、グループで話し合ったり様々な活動が可能です。どちらの方法も、参加者自身が主体的になる姿勢が求められます。作品やアートカードをよく見て、考えたことを発表したり、感じたことを表現したり、グループで話し合ったりしながら、主体的に意味を見出します。そこに、脳力を覚醒する効果が期待できそうです。竹箒の会の新事業の構想段階で相談を受け、高齢者や健康長寿分野の研究者が加わるといい事業になると申し上げました。その方向で、事業化が検討されており、今後が楽しみです。

竹箒の会の新事業は、「元気な高齢者」を対象に、アートカードゲームでスタートすることを考えられているようですが、グループでの対話を進行するボランティアさんにも、ゲームに関する一般の高齢者にも、健康や長寿に関する効果が期待できると思っています。また新事業が軌道に乗った後に、杉並区全体を美術館と見立てた、「わがまちアートカード」の作成と活用の計画もあるようです。全国的にも行われていない新しい活動で、とても楽しみです。これも健康長寿効果が期待されるプランです。

※ニューヨークの近代美術館が保険会社と開発した対話型美術鑑賞による認知症改善プログラムを日本で導入した例。NPO法人アートライブによるもので、国立長寿医療研究センターと共同の調査結果をHPで報告している。